

Я. А. Спринчак:
ОЧЕРК РУССКОГО ИСТОРИЧЕСКОГО СИНТАКСИСА.
Киев. 1960.¹

この書物は題名の示す通り、古代ロシア語の統辞論を中心として、その史的变化を記述している。体裁は小ではあるが、重要な事項は殆んど網羅して居り、例文も概ね適切である。紙数の関係上細部にわたる事は許されないの、単なる紹介に終わってしまうことになると思うが、以下いささかなりとも内容に触れてみたいと思う。

本書の構成は、**I** 緒論、**II** 単純二肢文とその主要成分、**III** 単純一肢文の種類、**IV** 敷衍二肢文 (распространенное двусоставное предложение) の副次成分とその史的变化、**V** 単純錯雑文 (простое осложненное п.) の種類、**VI** 古代ロシア語の否定表現、**VII** 単文の語序、**VIII** 結論、となっている。

このような記述体系は、以前よりソヴェト統辞論が採用している方式の踏襲に過ぎないが、本書において特に興味を惹くのは緒論の部分であろう。これによれば、「社会学的言語学及び構造主義の代表者達の歴史主義からの逸脱は、ディアクロニーからサンクロニーを切り離し、また構造主義者に見られるように、サンクロニーをパンクロニー及びアクロニーに転化させるものとして説明される」(p. 15) のであり、一方「マルクス・レーニン主義の方法論に基づくロシア語の史的統辞論は未だ存在しない」(p. 47) とするところから、「ソヴェト言語学は、弁証法的唯物論の方法に基づき、言語の史的発展のマルクス主義的理論を創造するよう要請されている」(p. 15) というのである。

周知のように、スターリン批判以後ソヴェト言語学は理論的混迷に陥り、現在なお完全にはこれを脱していない。本書に展開された理論も、未だ著るしく不完全ではあるが、ソヴェト言語学の欠陥をみとめ、積極的にこれに対処しようとしている点で、やはり一時期を画しようとするものであろう。

著者は「言語は思惟の直接的現実性であり」「言語の歴史は思惟の歴史に等しい」(p. 4) とするマルクス及びレーニンのテーゼから出発する。ここから「文の構造としての判断の形式は、客観世界のディアレクティケーの反映として造り上げられて来た」(p. 6) という考えが導き出される。判断の基本的な型に照応する二肢文を統辞論の基礎とする本書の構成は理論的にはここにつながるのであるが、上述の前提の可否は別として、思惟と言語のこのような直接的な結合については、議論の存するところであろう。

また彼は唯物弁証法を導入して、「言語の統辞論的体系の発展と完成の源泉は、歴史的に発展しつつある言語の体系における新しいものと古いものとの闘争であり、その過程

¹ 『言語研究』 第43号 昭和38(1963)年2月 57-60頁。

において古い形式が死滅し、破壊され、造り変えられ、また新しい形式が創造され得るのである」(p. 18)と述べている。

彼が言語の発展の合法則性と呼び、内的法則といっているのも、実はこの唯物弁証法を指しているのに外ならないと思われる。

しかし乍ら少なくとも本書に関する限り、著者の理解は余りにも図式的である。あらゆる新しいものが、常に古いものにとってかわるとは限らないからである。或る形式 A に属する事象 $a_1, a_2 \dots a_n$ に対し、何等かの事情で新たに b なる事象が現れ、この影響下に系列 $a_1, a_2 \dots a_n$ の一部あるいは全部が $b_1, b_2 \dots$ によって置き換えられ、 A と対立し或いは A を置換する形式 B が立つとき、真に問題とすべきは、なぜ $b_1, b_2 \dots$ がついに A に影響を及ぼし得たか、を明らかにすることでなければならない。逆に A が b に作用し、これが新たな形式 B に発展することなく消滅する場合もまた多いと考えられるからである。

II 章以下の具体的な記述においても、多くの場合歴史変化の結果が列挙されているに過ぎないという点で、本書も従来のものに較べて特に新味はない。「若し言語現象の外面的な記述に限ることを欲せず、史的統辞論の過程の合法則性を措定せんとするならば、科学は「何故?」という問に答えねばならない」(p. 16) という指摘も、単なる原則論的な要請に留まっている。本書が「便利な本」以上に出ないのは、主としてこの故である。

例えば II で述べている二肢文の特殊な場合として、III では文肢の一方を欠くもの（不定詞文、名詞文、無人称文 etc.）を取り扱っているが、ここで例えば **погребень бысть Игорьъ** «イーゴリが埋葬された» のような文の主語と述語の呼応が破れ、また **писано бо есть** «何故なら（聖書には）かく誌されているからである» の如き無主体文の影響下に被動形動詞の他動詞性が強化されたことと相俟って、例えば **медъ дано бысть богомъ** «蜜は神によって与えられた» のような形を経て、主語が対格補語と意識されるようになり、やがて **а самого князя великого Дмитрия ранено** «ところで大公チミトリー自身も傷ついたのである» のような無主体文が成立する、という仮説を提示している (p. 98 & seq.)。これは極めて独創的な考えであるが、畢竟成立過程に関する言説に過ぎず、「何故」という問に答えるものではない。緊密である可き主語と述語の呼応が何故破れ、かかる経過を辿るに至ったかを、特に我々は知りたく思うのである²。

IV は文の主要な成分である主語と述語を除く副次成分を扱ったものである。ここでも著者は、例えば形容詞の長語尾形と短語尾形を定性と不定性の対立であるとする従来の説に無批判であった結果、「物主形容詞は完全に特定の対象を規定しているにも拘わらず…その短語尾形のみが使用されて来た」という矛盾に陥らざるを得なかった（これについては『言語研究』第41号の拙稿参照）。また「ロシア語のその後の発展において、短語尾形形容詞の述語的職能における使用が圧倒的であること、及びそれらが常に主語にのみ使用されていたため曲用を失ったことと関連して、規定語の位置にある形容詞短語尾形への長

²補足参照。

語尾形による圧迫が生ずる」(p. 115)と述べているのは本末転倒である。短語尾形が斜格を失ったのは、これが述語として用いられるようになった為であって、決してその逆ではない。

格の用法について、生格の基本的意義を行為が不完全にしか及ばない対象を示すものとし、これと古い従格としての分離の意義から種々雑多な性格の用法を統一的に説明しようとして居り、これは生彩に富んだものとなっている（特に興味のあるのは、否定生格の来源を従格の意義に求めていることである）が、その外は概ね用法を羅列しているに過ぎないように思われる (p. 111 & seq.)。

また行為が不完全にしか及ばない対象を示すという生格の原義からこれが対格に似た職能を持つに至ったとして、所謂活動体対格の発生を説明している (p. 134) のは卓見であるが、しかしこれが何故活動体名詞、特に指人名詞という意義範疇と結びつくに至ったかは考えられていない（これを説明するためには活動体名詞の表わす対象は不活動体名詞の場合に比べて個性が強く、外部から加えられる行為が完全にこの対象に及ぼされることを許さない、といった活動体という範疇の価値を考えねばならないであろう）。その一般化の過程についても、歴史的に事実を提示するだけに終っている。

しかも、П. С. Кузнецов, П. Я. Черных 等の「対＝生格形が完全な権利を有する人物を表わす名詞に使用されていたとする学者の見解」を著者は「正しくないもの」として却け、「対＝生格はルスカヤ・プラウダにおいて＜完全な権利を有する＞人物を表わすか、＜不完全な権利しか有しない＞人物を表わすかに関係なく使用されていた」(p. 170)として用例を挙げている。しかし乍らこの形式が完全な権利を有する（従って個性の強い）人物に現われる傾向があったのは事実であり、またこの範疇が当時発展の比較的初期の段階にあった事を考えれば、例外のあるのがむしろ当然であろう。

これらのことは、著者にとってディアクロニーとサンクロニーの統一が、未だ図式的な理解に留まっていることを示しているように思われる。歴史主義を重視する余りサンクロニーを閑却するならば、かえってそれは *Stoffdenken* に墮してしまうであろう。

その他例えば *поставлю оуношю князя имъ* «その若者を彼等の公としよう» (p. 182) のような所謂第二斜格 (*вторые косвенные*) が、*постави ярославъ Лар-иона митрополитом* «ヤロスラフはイラリオンを府主教に任じた» (p. 183) のように叙述の造格 (*творительный предикативный*) によって置換されていくが、何故このような過程が生じたかについては、第二斜格が意義的に独立性を強めたからである (p. 183) と説明されているに過ぎない。

数詞の項においては、*два, двѣ* が始め双数主格形の名詞を限定していたが、やがてこの形が形態上の一致と双数形の廃滅から単数生格として意識されるに至った経過が述べられている。これに関連して「ロシア語のその後の発展において、数詞 *три, четыре* は、数詞 *два, двѣ* と同じグループに入り、双数形の名詞と共に使用されるに至った」(p. 190)と述べられているが、何故かかる特異な現象が生じたかについては、残念乍ら全く触れら

れていない。

その他 **V** は間投詞、挿入句、絶対与格などで複雑にされた文を取扱い、**VI** は **ни, не** の使用について、また **VII** は主語と述語の位置、規定語の位置などを、夫々簡単に取扱ったものであり、特に述べる可きものはない。

以上欠点ばかりを拾い上げたかに見えようが、これらの欠点は、何も本書に限ったものではない。我々自身にも共通であるこれらの欠陥を、本書を通じて明確に把握すること以外に他意はないのである。

結論として言えば、既知の事実を要領よく整理しているという点で、一応成功はしているが、新しいものと古いものとの闘争による古い形式の死滅と新しい形式の創造を史的統辞論の原理とする本書において、このような過程の生ずる原因についての考慮が十分に為されていないのは、致命的な欠陥であると思われる。進化論においては、これは外界への適応という名の下に総括される諸要因であったが、言語の場合には、私見によれば、一定の形式に与えられる価値に集約される使用者の心の動きであると思われる。

もう一つの欠陥は、既に述べたように、歴史主義を重視する余り言語現象をそのおかれた体系において見るという努力が閑却されているような傾向が見えることである。

しかし乍ら、このような欠陥はあるにしても、本書にみられるようにマルクス主義言語学の理論を創造しようとするソヴェトの学者の努力には注目すべきものがある。本書において展開された理論も未だ不完全ではあるが、スターリン批判直後から較べれば著るしい進歩をとげて居り、今後が期待される。

【補足】

ソヴェト政権があっけなく崩壊した現在、この書評を読み返してみれば、当時著者が大上段に構えていた史的唯物論という名前は別にして、ここで述べた事が特に古くなったという事はないように思われる。今になってみれば、スターリン批判以後ソヴェトの学問は様々な形でそれまでの桎梏から自由になり、それは言語学では構造主義的思考の復活、記号論の発達、スターリンによって批判されたマールの思想の再検討とそれにとまなう類型学の研究の復活のように、新しい質を獲得したと思われる。その意味でスターリン批判は極めて重要な歴史的意義を持っていた事が証明されたように思われる。

その内容的類型学の立場からみれば、本文に注した箇所は、主語と述語の関係を緩やかにするというロシア語の一般的傾向の結果であるように思われる。